

ACCESSIBLE DESIGN

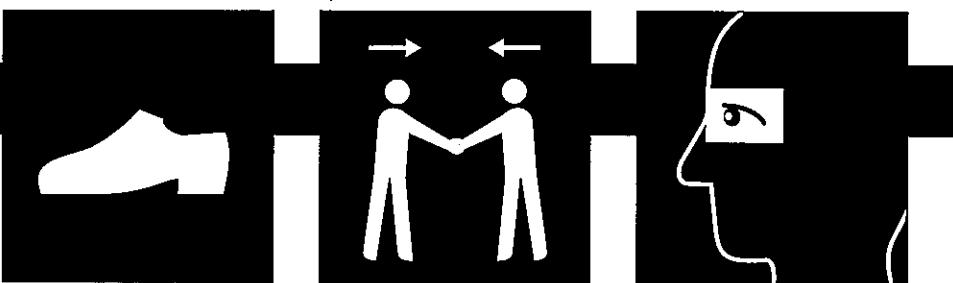
The Periodical of

アクセシブルデザインの総合情報誌
インクル
2008(平成20)年11月25日 NO.57

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)
共生社会の実現を願う候「インクル」、「包括的教育理念」を意味する英語「Inclusion」から名付けました。

目次 / contents

「サイトワールド2008」開催 機構ブースでADの最新商品・技術を紹介 (高嶋健夫)	2
<特集>アクセシブルデザイン国際標準化 国際連携、日本がリーダーシップ発揮!	
【報告1】ISO/TC173(福祉用具) 日本から“AD専門分科会”的新設を提案 (星川安之)	3
【報告2】欧州AD推進会議 欧州標準化委員会に新たなWG設置へ (星川安之)	5
【報告3】ISO/TC122/WG9(包装・容器) ドラフト案を本格審議、2年後の国際規格化にメド (星川安之)	7
「2008東京国際包装展」 AD配慮のパッケージ、大きな潮流に (星川安之)	8
<寄稿>みんなで楽しめる「まつりつくば」 手作りの地域バリアフリーへの取り組み (生田目美紀)	
<隨想 私と共に用品>第35回 困ったときにも、前向きに「不便さチェック」(小川光彦)	
<この業界・この団体> 点字つき絵本の出版と普及を考える会 見えない人と見える人が共に楽しむために (高嶋健夫)	
<ニュース&トピックス> 徳武産業「あゆみシューズ」に高級外出靴シリーズ／スワニー、「ウォーキングバッグ」に旅行用の新タイプ発売 (高嶋健夫)	
<キーワードで考える共用品講座> 第55講 「R60マーケティング(上)」(後藤芳一)	
<事務局長だより>知りたい時が、話したい時 (星川安之) 共用品通信	
<わが社のエース> (株)小学館「ドラえもんの車いすの本」 増刷重ね、インドネシア語・タイ語にも翻訳 (高嶋健夫)	
奥付	16



■「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則(JIS T0103)」に収録されている絵記号例。左から「靴」「会う」「目」(共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます)

「サイトワールド2008」開催 機構ブースでADの最新商品・技術を紹介

視覚に障害のある人のための総合イベント「サイトワールド2008」((社福)日本盲人福祉委員会主催)が11月2~4日の3日間、東京・錦糸町の「すみだ産業会館サンライズホール」(丸井錦糸町店8階)で開催された。3回目を迎えた今年は3日間合計で5000人以上が来場し、秋の恒例行事として視覚障害者コミュニティの間ですっかり定着した感がある。財共用品推進機構は今回も独自ブースを出展し、アクセシブルデザイン(AD)製品の最新動向を紹介した。

今回の出展者は43の国内外の企業・団体で、機構のほか、(社福)日本点字図書館、(社福)視覚障害者支援総合センター、サン工芸、東京電力、TOTO、日本IBM、パナソニック、NTTドコモ、シナノケンシ、アメディア、コーポレーションパールスターなどの国内企業・団体に加えて、海外の福祉機器メーカーなどが軒を並べた。

高音域の音を聞き取る“テスト”も実演

機構のブースでは、おなじみのシャンプー容器の「ギザギザ」や牛乳パックの「切り欠き」などに加えて、今回は、(社)日本玩具協会の「第1回日本おもちゃ大賞」の「共遊玩具



■多くの来場者で賑わった機構ブース

部門」で大賞を受賞した「おしゃべりいっぱいアンパンマンレジスター」(セガトイズ)をはじめ、「おしゃべりあいうえお」(タカラトミー)などの受賞作品を展示。さらに、パソコンを使い、音の周波数によって高音域がどこまで聞き取れるかを実験できるソフトも展示了。これは(独)製品評価技術基盤機構(NITE)が開発したもので、多くの人が“挑戦”していた。

このほか、TOTOは公共トイレの操作部の配置に関する日本工業規格(JIS)を現物を再現して紹介。NHK放送技術研究所はデジタル放送のデータ放送を、パソコンを使って音訳、点訳、拡大表示する独自開発ソフトを実演展示了。地上波デジタル放送への完全移行を前に、視覚障害者や高齢者などの間で操作の難しさへの不満が出ていることに対応したもので、データ放送の活用促進を後押しする新技術として、来場者も高い関心を示し、早い実用化への期待を寄せていた。

(高嶋健夫)



■公共トイレのJISを展示したTOTOブース(左)と、データ放送関連技術を紹介したNHK放送技術研究所のブース(中・右)

<特集>アクセシブルデザイン国際標準化 国際連携、日本がリーダーシップ發揮 着々と枠組みづくり、ISOには専門の受け皿

日本のリーダーシップによるアクセシブルデザイン(AD)の国際標準化が一段と加速してきた。10月には国際標準化機構(ISO)の2つの専門委員会、TC173(福祉用具)総会とTC122(包装・容器)の作業部会、欧州標準化委員会CENなどが主催する国際的なAD推進会議が相次いで開催され、いずれにおいても、この分野の国際標準化を主導する日本が大きなプレゼンスを示し、今後の検討・策定作業の枠組みづくりなどで成果を上げた。そこで、それぞれの会議の概要と今後の展望などについて、星川安之・財共用品推進機構専務理事が報告する。

【報告1】ISO/TC173(福祉用具) 日本から“AD専門分科会”的新設を提案

10月27日、ドイツ・ベルリンで欧州各国などから約30人のメンバーが参加し、TC173の総会が開催された。日本からはTC173の国内委員長である山内繁・早大教授、日本工業標準調査会(JISC、事務局は経済産業省)の相澤幸一氏(経済産業省環境生活標準化推進室長)、天下龍蔵氏(同室係長)、佐川賢・産業技術総合研究所人間福祉医工学部門上席研究員、星川ら7名が参加し、AD規格を検討・作成するための専門分科会(SC)の新設を提案、承認された。今後正式な投票を経て設置の運びとなる。これにより、ISO内に“ADの受け皿”ができることになる。

絵記号、触知案内図なども国際規格に

ISOには現在約230の分野別TCがあり、それぞれのTCにはテーマ別のSCがある。さらに、SCには作業グループ(WG)があり、個々の規格の詳細はこのWGで作られている。このため、ISOに国際規格の制定を提案する際には、該当するTCに個別に提案される。そこで審議することが承認されて初めて、各國の委員が集まり、提案国が示したたたき台

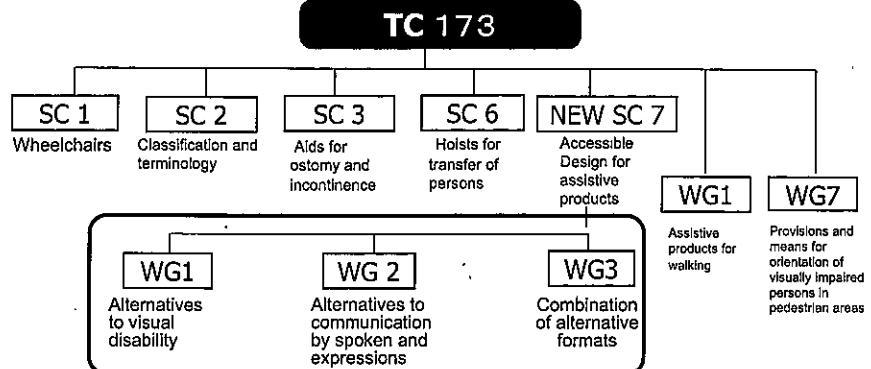
を元に、文章表現、技術面などさまざまな角度から国際規格化の検討が行われる。こうしてWG→SC→TCと三段階の検討を経て、最終投票で合意したものだけが国際規格として制定される。

AD規格については、2001年に日本の提案で「ISO/IECガイド71」(高齢者及び障害のある人々のニーズに対応した規格作成配慮指針)が制定され、03年には同ガイドが日本工業規格(JIS Z8071)になった。それから約5年が経過し、日本では同ガイドに基づく27種の規格が「高齢者・障害者配慮JIS」として制定された。

このうちの5規格は現在、日中韓3カ国の共同提案によって国際規格化の検討作業に入っている。5規格とは、包装・容器(JIS S0021)、凸記号表示(JIS S0011)、報知音(JIS S0013)、同妨害音・音圧レベル(JIS S0014)、年代別相対輝度の求め方・光の評価方法(JIS S0031)である。

このうちの包装・容器に関してはTC122(包装・容器=事務局は日本)にあるWGで、他の4規格はTC159(人間工学=事務局はド

TC173／NEW SC Accessible Design for assistive products



■TC173の新しいSCとWGの関係

イツ)で検討が行われており、順調にいければ2010年春にも国際規格化が実現する見通しである。

“所管不明”の規格を検討するために

しかし、これら5規格だけですべての問題が解決するわけではなく、まだまだ多くのテーマを国際標準化する必要がある。そこで、日本としては、これら以外の22のJISについても順次、国際規格化を実現させるようISOに働きかける方針であり、目下、精力的に取り組みが続けられている。

情報機器やウェブ(WEB)などに関するAD規格に関しては、ISO内に該当するTCがあり、すでに各TCに国際規格化の提案がなされている。問題は、しかるべきTCが存在しないAD規格の取り扱いである。

具体的には、公共設備における点字表示(JIS T0921)、触知案内図(JIS T0922)、公共トイレの操作部の配置(JIS S0026)、コミュニケーション支援用絵記号(JIS T0103)、さらに共用品推進機構が事務局となって現在原案を作成中の「アクセシブル・ミーティング(アクセシブルな会議のあり方)」に関する規格などが、それに当たる。

そのため、JISを統括しているJISCや関係機関と協議し、一番適したTCの中にADを専門に検討するSCを作ることを提案する方向

で、今年度から国内で本格的な調整を重ねてきた。

その結果、福祉用具を専門とするTC173へのSC新設を提案することで合意をみた。当初は福祉用具とAD製品(共用品)との関係が議論になったが、ISOでは「福祉用具(アシティブ・プロダクト)」は「障害のある人の生活を支援するもの」と定義されており、その定義に準ずれば、ADもその範疇に入ることになると判断された。

ISO定義を踏まえ、福祉用具TCに提案

こうして今年7月には、山内委員長、相澤室長で、TC173の国際幹事と議長を出しているスウェーデンを訪問。専門SC設置提案の目的や内容を説明。その結果、議長、セクレタリー共に日本の提案を前向きに受け止めていただき、10月の総会で、将来計画の検討項目の1つとして日本からプレゼンテーションを行うこととなった。

当日の総会では、TC159(人間工学)に昨年11月に発足したADを普及させるグループ「AGAD」の議長である佐川賢氏が、プレゼンテーションを行った。

佐川氏は日本が「ガイド71」を提案し、すでに多数の規格を策定してきていることを、具体例を示しながら紹介。シャンプー容器の識別などには多くのメンバーが関心を示した。中には、「シャンプー容器の識別をこの委員会で作るのか?」と誤解する向きもあったが、「そうではなく、他のTCで扱っていない規格を中心に担当する」旨を説明し、合意を得ることができた。

こうして総会の終わりには、次のようなレスリューション(決議文)が採択され、本件

の合意事項が確認された。

Resolution 267

The committee requests the secretariat of ISO/TC 173 to implement the voting procedure for the establishment of a new Subcommittee on Accessible Design.

Resolutions 13th meeting of ISO/TC173 27 October 2008

決議267

本委員会はアクセシブルデザインに関する新しい分科委員会の設立のための投票手続きを実行することをISO/TC173の事務局に要

請する。

この決議文を受けて、日本はSC設立のための正式書類をTC173事務局に提出し、投票にかけられることになる。その結果、同TCのメンバー国3分の2以上の賛成が得られ、さらに5カ国以上の国がこのSCに参加する意思を示せば、最終的にはISO内の上部決定機関であるTMBの承認が必要となるが、まずは第一段階突破となる。

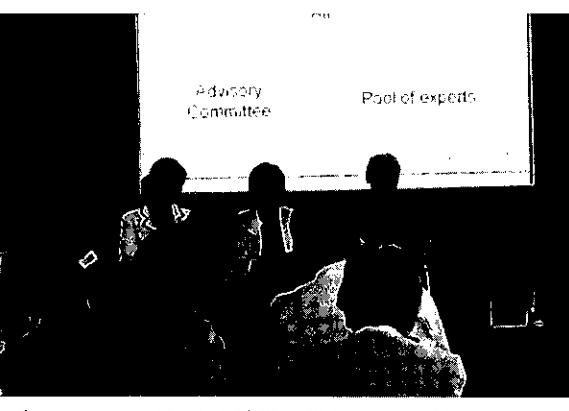
今後はさらに多くの国と話し合いを重ねながら、本提案の実現に万全を期したいと考えている。なお、図は、新SCが成立した時のSCとWGの関係を示したものである。

【報告2】 欧州AD推進会議

欧洲標準化委員会に新たなWG設置へ

10月29日、ベルギー・ブリュッセルで欧洲標準化委員会(CEN)、オランダの規格協会(NEN)、欧洲の消費者団体(ANEC)の三者が合同で主催する「アクセシビリティー・フォー・オール」と題された会合が開催された。欧洲各国から60人以上の関係者が集まり、日本からは佐川賢・AGAD議長、相澤幸一室長、星川らが参加した。

この会合の目的は、「ISO/IECガイド71」の欧洲規格である「CEN/CENELECガイド6」を活用して、高齢者・障害者配慮の規格をより多く作成し、より多くの人たちが日常



■ブリュッセルで開かれた欧洲AD推進会議の模様

生活を不便さを感じることなく過ごせる社会づくりを推進すること。そのための具体策として、CEN内に新たにアクセシブルデザイン(AD)を専門に担当する作業グループ(WG)を設置することが提案され、日本もそれに呼応して国際連携のいっそうの推進を呼び掛けた。

アドバイザーと障害のある人で構成

ヨーロッパには、欧洲連合(EU)各国の規格作成機関が加盟しているCENがあり、域内の統一規格を策定している。さかのほること7年前、ISOが日本の提案で制定した高齢者・障害者配慮設計指針「ISO/IECガイド71」を、CENは直ちに導入し、欧洲規格の「CEN/CENELECガイド6」として制定された。CENELECは、電気関連の規格を制定する専門機関で、国際機関では国際電気標準会議(IEC)に相当するものであり、「ガイド6」は2つの機関が合同で制定したものである。

「ガイド71」を成立させ、ISOの人間工学分野の専門委員会「TC159」で同じ目的の普及グループ「AGAD」設置を提案し、議長国を務めている日本としての責任もあり、今回の会合に出席させてもらった。

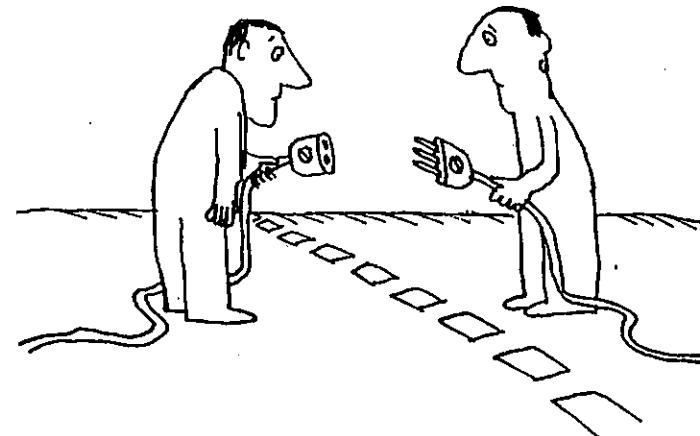
午前中の会合の冒頭に、欧州委員会の担当者から、EUとしてのアクセシビリティへの取り組みの現状が、ISOの欧州向け指令（マンデート）の経過と共に説明された。それによると、建築関連、旅行、情報、設備機器の各分野で推進されてきているとのことである。そして、今年はさらにEUとしてアクセシビリティに力を入れ、CENや各国の規格作成機関に新たな指令を出していく方針であることが報告された。

続いて、オランダ規格協会の担当者から、今回の会合の目的が詳細に説明された。その中では、「ガイド6」を使って、より多くの分野でアクセシビリティを強化するために、CENの中に「アクセシビリティ・オール」というWGを発足させることが提案された。

同協会の報告の冒頭では、「規格がなければいかに大変か」を表すイラストが紹介された（=右上）。そこには、国境をはさんで、3つの足が出ているコンセントを持った人と、2つしか穴のないソケットを持った人がお互いに困った顔をしている場面が描かれている。標準化がいかに大切かを説得するにはなかなか優れたイラストである。

続いて、世界と欧州での標準化の現状、障害者・高齢者の不便さの現状とADの標準化を進めるための視点を軸に話が進められた。

そして、今会合の主題である新たなWG新設の提案となった。提案によると、WGはCENの中に作り、大きく2つのグループとする。1つはアドバイザーの委員会、もう1つは専門家の集団である。後者は主に障害のある人たちで構成され、関係する規格作成委員会に出席したり、モニタリングに協力した



りするといった構想になっている。

日本も呼応、さらなる国際連携を提案

午後は参加者からの質疑応答、意見交換などの時間に充てられた。「構想はいいが、誰がどの程度作業を行うか？」「その際にかかる費用は誰がどのように負担するのか？」といった基本的な質問のほか、「なぜ欧州だけで行おうとするのか。もっと国際的な連携を図るべきではないか」といった建設的な意見も出された。これは、日本と連携してこの作業を長年行ってくれたドイツの発言で、すでに日本が10年前から課題解決に向けて着手し、ISO内でも作業が進んでいることを踏まえての援護射撃的な発言だった。

その発言を受け、日本から参加した佐川賢・AGAD議長から、日本の経験や今後の計画を説明、「お互いの作業にプラスになるように、可能であるならば連携しよう」との提案を行った。

異なる文化の中で生まれた知恵を出し合っていくことは、素晴らしいことであり、「ガイド71」の提案・作成に関わった者として、これだけ大勢の関係者が欧州各地から集い、同じ目的で議論していることに感動すら覚えた。ただ、欧州だけで考えるのではなく、国や地域の壁を越えながら知恵を出し合うことが、ADを1日でも早く実現させる「ツボ」と改めた思った次第である。

【報告3】ISO/TC122/WG9（包装・容器） ドラフト案を本格審議、2年後の国際規格化にメド

国際標準化機構（ISO）の包装・容器に関する委員会「TC122」内に設けられたアクセシブルデザイン（AD）の作業グループ「WG9」の第2回会議が、「2008東京国際包装展（TOKYO PACK 2008）」の最終日である10月11日、東京ビッグサイト内の会議室で開催された。会議にはスウェーデン（2名）、オランダ（1名）、アメリカ（1名）、日本（4名）、およびオブザーバーとしてタイ（1名）、日本（10名）が参加した。

TC122の幹事国は、昨年から日本がイランと共同で引き受け、事務局は日本包装技術協会（JPI）が担っている。2007年7月、日本からTC122に日本工業規格（JIS）「高齢者・障害者配慮設計指針－包装容器－」の新規国際規格提案（NWIP）を行って承認され、同委員会の中にWG9「包装・容器におけるア

クセシブルデザイン」が新設された。

その後、今年4月に第1回の会合がドイツで開かれ、JISを元に国際規格を策定するための文書作りが始まった。この委員会のコンビナー（議長）は産業技術総合研究所の佐川賢氏、セクレタリーは日本包装技術協会の石崎奈保子氏、日本からの専門家（エキスパート）には、「ISO/IECガイド71」の委員でもあったタカラトミーの高橋玲子氏がそれぞれ務めている。

欧米各国が独自の調査研究を報告

今回の会議では、冒頭で日本を代表して日本工業標準調査会（JISC）の立場で経済産業省の相澤幸一氏から歓迎の挨拶と共に、日本としてのAD標準化が重要な政策の1つになっていることが報告された。

目指して活動をさらに展開していきたい。

会議重ね、相互理解に大きな前進

コンビナー・佐川賢氏の話

今回は、本WGに強い関心を寄せるドイツから1人も参加しなかったのは残念であったが、スウェーデン、オランダ、タイ、米国などが参加し、ドラフトの審議が予定通り進行できたのはたいへん喜ばしいことであった。

設立当初はCENにおける審議との重複などのいくつかの懸念もあったが、2回目の委員会に参加することによって、そのわだかまりも解消したようである。委員同士の堅さも取れ、ようやく実質的な規格作成作業に集中できたと言えよう。

今後は、包装・容器分野のADの体系化を

「融合・調和」のモデル示す セクレタリー・石崎奈保子氏の話

今回は、規格原案作成作業の中心メンバーである日本の委員の方々に、オブザーバーとして多数ご出席いただき、アクセシブルデザインの本質と包装のあり方を念頭においた規格作成作業を円滑に行うことができました。

国の利害を超え、良いものは良いと認め、妥協ではなく、「融合・調和」をめざす姿勢は、ISOの本来の目的に適っていると思います。他のWGに対しても良いモデルとなるでしょう。

AD配慮のパッケージ、大きな潮流に 「2008東京国際包装展」開催



ISO/TC122の事務局である(社)日本包装技術協会(JPI)主催による「2008東京国際包装展(TOKYO PACK 2008)」が、10月7~11日の5日間、東京ビッグサイトで開催された。今回で22回目を迎えるこの展示会には国内外から約550の企業・機関が出展し、期間中約20万人が会場を訪れた。

今回のテーマは「包装がはぐくむ環境 きれいな地球」であるが、「人に優しい」「ユニバーサルデザイン」などの言葉で、多くの企業が高齢者や障害のある人たちへの配慮や工夫を各ブースで紹介していた。

点字での表示、開けやすさ、表示の見やす

続いて、議長の佐川賢氏からISOおよびその他の国際的機関におけるADに関する活動状況が報告された。

その後、スウェーデンの委員から人間工学研究所において行われている包装・容器に関する研究、続いて、アメリカの委員からミシガン州立大学での研究成果が報告された。

さらに、スウェーデン規格協会の委員から、欧州規格作成機関のCENでの包装容器に関する作業・研究状況が報告された。この中では、現在70人の高齢者を対象にして包装容器の開けやすさに関する検証を行い、09年3月

さ、リサイクルのしやすさなど、多くの貴重な創意工夫、新機軸の研究開発と実用化が進み、「アクセシブルデザイン(AD)に配慮した包装・容器」がパッケージ業界の大きな潮流になっていることがわかる展示会でもあった。

シャープ、味の素などがADで受賞

特に会場で一般公開された「日本パッケージコンテスト2008」の受賞作品には、最高賞の「ジャパンスター賞」をはじめ、高齢者・障害者への配慮を取り入れているパッケージが数多く含まれており、同展と並行して開催されたISO/TC122/WG9に出席した欧米など海外の委員も高い関心を示し、熱心に観察する姿が目立った。

同コンテストは、優れたパッケージの技術と普及を目的としてJPI主催で毎年行われており、材料、設計、技術、デザイン、ロジスティクス、環境対応、適正包装などあらゆる機能から評価し、食品部門、医薬品部門、化粧品部門、電気・機器部門、日用品・雑貨部

の完成を目指して規格の作成作業を進めていることが報告された。

また、オランダ包装・容器研究所の委員から、包装・容器のADの意義に関して「ビジネスを展開するうえでも重要である」と、多くの数字を示しながらのプレゼンテーションが行われた。

こういった実践的な内容のプレゼンテーションは、高齢者・障害者配慮の標準化がなされた後、これら標準化の成果がビジネスの現場で活用されていくために必要不可欠なことと思われる。

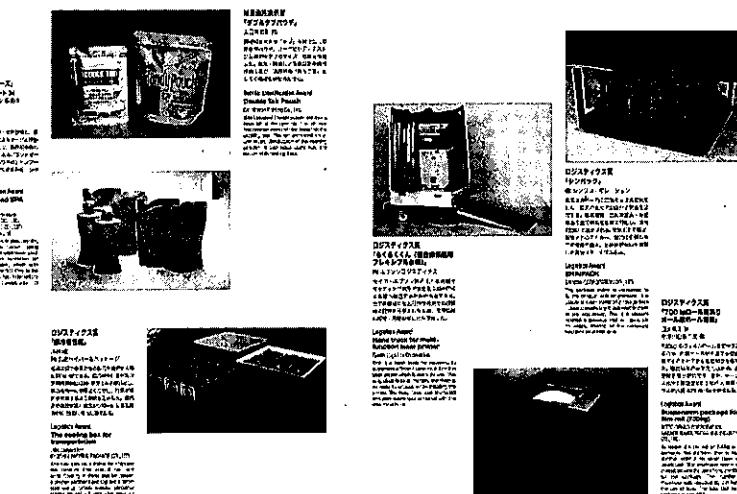
門などから年間の優秀作品を選定する。入賞した作品には「GPマーク」を表示することができる。

AD関連を中心とした今年の主な受賞作品は次の通り。

<ジャパンスター賞>

経済産業大臣賞=大型壁掛け薄型テレビ『アクオス』のユニバーサルデザイン包装(シャープ) ▽経済産業省産業技術環境局長賞=キシリトール・ガム「プライムミント」エコボトル、同「ホワイトクール」エコボトル(ロッテ) ▽経済産業省製造産業局長賞=自動車用ヘッドライトの包装改善(ホンダ) ▽日本商工会議所会頭賞=ダンポスト(福永、福良梱包) ▽(財)クリーン・ジャパン・センター会長賞=ULB:ユニバーサルライトウェイトボトル=アセプティック充填用ペットボトル(東洋製罐) ▽(社)日本マーケティング協会会長賞=ほんだし®(味の素、凸版印刷、大日本印刷、東洋ガラス、東京ライト工業、フジシール、吉林紙工) ▽(社)日本包装技術協会会長賞=まるごと自然に還る わかめラーメン(エースコック、日清) /アルコール除菌ウェットタオル(ユニ・チャーム、大日本印刷)

GOOD PACKAGING



■触覚識別表示賞の受賞作(日本包装技術協会資料より)

<グッドパッケージング賞>

▽触覚識別表示賞=カゴメトマトケチャップ(カゴメ) /600gUDエコペット=食用油用ボトル(J-オイルミルズ) /ダブルタブパウチ(大日本印刷) /サロンスタイル・ヘッドスパシリーズ(コーセーコスメポート、伊藤鷹也デザイン事務所、吉野工業所、北村化学産業、大日本印刷)

なお、次回の「東京パック2010」は2010年10月5~8日に、同じ東京ビッグサイトで開催される。

(星川安之)

論に役立つ貴重な情報提供を行った。

今回の会議で出た意見をまとめ、次の段階では委員会の承認文書を作成。TC122に参加しているすべての国の投票で半数以上の賛成を得られれば、次の段階に進むことになり、早ければ2年後には日本発のAD規格がISOによる国際規格になる。

共用品の代表選手である「シャンプー容器のギザギザ」や「牛乳パックの半円の切り欠き」なども本規格の参考として紹介することを本WGから今後提案することになる。

<寄稿>みんなで楽しめる「まつりつくば」手作りの地域バリアフリーへの取り組み

なまためみき
生田目美紀・筑波技術大学総合デザイン学科教授

「まつりつくば」は1日約50万人が来訪する茨城県つくば市最大のイベントです。地域の人々と市が一緒に企画運営をし、大学生やNPOをはじめ多くのボランティアに支えられているお祭りです。このお祭りは子供、お年寄り、外国人、車いすの方など市内外から多様な来訪者があります。お祭りはつくばエクスプレス(TX)つくば駅を中心に行われ、南北約1kmにわたる歩行者専用道路には、所せましとお店が並びます。広範囲な会場は、高低差あり、未舗装の広場ありと、決してバリアフリー環境とはいえないかもしれません。お祭り会場の多様なバリアを人の知恵と力で1つでも取り除こうとした活動を紹介いたします。

市民、行政、教育機関……みんなで推進

「まつりつくば」のバリアフリー化への取り組みはつくば市ユニバーサルデザイン推進活動の一環として2007年から開始されました。多数の教育・研究機関があり、日本で唯一の障害者のための大学があるつくば市のUDコンセプトは「人づくりで推進するUD」です。これをお祭りで展開した理由は2つあります。1つは、お祭りは行政と市民の距離が縮まる場であること。誰もが楽しめるお祭りを目指すことは、お祭りという場をフィールドとして、バリアフリー推進のモデルケースを構築できると考えました。2つ目は、活動を通じ

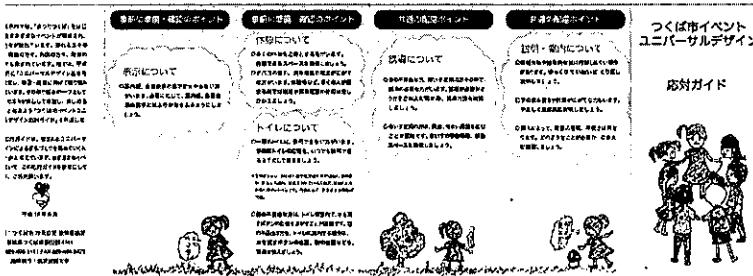
て、心のバリアフリーやUDを推進する人づくりが期待できることです。

具体的には、運営側に対して事前講習会を開催して「つくば市イベントユニバーサルデザイン応対ガイド」=写真下=を配布するという取り組みを行いました。これは事前準備や応対時の配慮ポイントを短時間で理解できるようにまとめたものです。講習会では運営側の担当内容や場所に合わせて、具体的にわかりやすく提案を盛り込んで話しました。

例えば、歩行者専用道路の出店団体に対する講習会では、歩道側にモノをはみ出させない、コード類の養生、価格の明示、メモの携帯など、当たり前の小さなことですが、どのようにしたらバリアを取り除けるのかについて、解説を加えながら提案しました。

もう1つの取り組みは、個別案内地図です。これはシンプルな会場地図にトイレの機能(多機能トイレなど)と使用可能な時間帯などがあらかじめ印刷されていて、相手の要望に応じて必要な情報を書き込んで完成させる地図です。地図を使いこなすために運営側の担当者は、担当場所付近の地形や目印、迂回路、さらに休憩所などをあらかじめ把握して書き込めるように、準備をお願いしました。

活動を開始して2年。環境的なバリア、心のバリアは少しずつですが減っていると思います。運営者対象の事後アンケートでは、バリアフリー化への提案や、地図が喜ばれたエピソードなどがあげられるというような変化が起きています。まだまだ課題はたくさんありますが、1歩ずつ進める手作りのバリアフリーは、お祭りだけでなく地域全体のバリアフリーへと発展すると信じます。



随想(第35回)
私と共用品

おがわ みづひこ(ベターコミュニケーション研究会『いくお~る』編集長、
小川 光彦(社)全日本難聴者・中途失聴者団体連合会 情報文化部副部長)

10年以上前でしょうか、共用品推進機構がまだE&Cプロジェクトという名前だったときでした。

さまざまな障害者を招いて「エレベーターで困ることを話してほしい」と言われ、「聴覚障害者にとってエレベーターは鬼門」「行き先が上か下かわからない」「どのエレベーターがくるか聞こえなくてわからない」「定期オーバーのブザーが聞こえないので人間関係を壊す」「誰かが気を遣って降りてしまったら、乗っている間は針のむしろ!」などなど、日頃エレベーターで困っていることをお話しさせていただいたことがあります。

皆様ご寛大にも、共用品の「き」の字も知らない若造の言うことに、思いの外ウケていただき、気をよくしました。同時に自分の困ったことをこんな風に楽しく聞いてもらえる場があるのかと、大変印象に残っています。

外見ではわからない「聞こえない障害」

それからいつの間にか「不便さチェック」をするようになりました。聞こえないと困ることを、いつか報告できるようにいろいろ見つけておこう、と意識が変わってきました。いざ困った場面に出くわして対処法がないと、どうしていいかわからなくなり、何も解決せずオタオタするだけになりがちですが、不便さチェックをする気になると、不便な状況に出会ったときに「しめしめ、またネタが増えた」と前向きになれるのは不思議です。

「聞こえない」という障害は、外見ではなかなかわかりません。周囲の人もわからないと、手助けしようがありません。本人が周囲にわかるように説明しないと、手助けしてもらえませんし、説明しても理解してくれる方ばかりではありません。説明はできても、相手の回答が聞きとれないかも……。

マイナスな要因ばかりを考えると、コミュニケーションすることまで、臆病になってしまいがちです。コミュニケーションの困難さから、人生に対する積極性を奪ってしまいがちな、大変な障害だと思います。

そもそも今の社会が聞こえることを前提に作られており、聞こえない人は電話、会議、アナウンス、警報音など、毎日困ることばかりです。世の中に聞こえない人がいるほうがおかしい、と言わんばかり。特に人生の中途で聞こえなくなった方は、職場や家庭で会話をしたり、テレビを聴いたり、それまで当たり前にできたことができなくなり、どん底に突き落とされます。聞こえなくなった人は「私って駄目なの?」「生きる価値もないの?」と、誰もが一度は自殺を考えるといいます。

1つひとつのチェックが国や社会を動かす

そんな人には、「あなたは間違っていない。あなたに合わせられない世の中が間違っているんだ」と、声を大にして言いたい!

そう思っていたときに出会った不便さチェック。小さな1つひとつのチェックの積み重ねがデータとなり、体系化され網羅されて資料となり、実績となり、社会全体を改善していく力となっています。特に「ガイド71」の制定以降、国や国際社会も力を入れていること、障害者にとって大きな後押しになっていることを感じます。

問題を客観視して捉えることができる「不便さチェック」。聞こえない、聞こえにくい仲間にもお勧めしたいと思っています。

なかのなつみ
(題字は中野奈津美・財共用品推進機構運営委員)



<この業界・この団体>点字つき絵本の出版と普及を考える会 見えない人と見える人が共に楽しむために

点字つき絵本の出版と普及を考える会は「目の見えない人と見える人が一緒に絵本を楽しめるようになること」を目的に、2002年4月に発足した。メンバーは点字付き絵本を出版している出版社、印刷会社、絵本作家、点訳ボランティア、研究者などで、現在、岩崎書店、偕成社、こぐま社、小学館、自由国民社、福音館書店、PHP研究所、ユニバーサルデザイン絵本センター、共同印刷、大活字、ジュンク堂書店などが参加している。

代表世話人は、「てんやく絵本ふれあい文庫」(大阪市)を主宰する岩田美津子さん。84年に岩田さんが個人のボランティア活動として立ち上げた同文庫は、市販の絵本に透明な点字シートを貼付した手作りの「点訳絵本」を制作・無料貸し出ししており、07年の貸出実績は延べ6750冊に達している。

『点字つき絵本・さわる絵本リスト』を作製

岩田さんが「点字付き絵本の普及にはより多くの関係者の参加が不可欠」と、こぐま社の佐藤英和社長を通じて点字付き絵本の刊行実績がある出版各社に情報交換の場作りを呼び掛けたのがきっかけで、第1回会合に参加した5社が中心になって活動がスタートした。

会では発足以来、年2回のペースで会合を持ち、コスト、技術、流通などさまざまな角度から課題を洗い出し、普及に向けた方策のあり方などについて議論を重ねている。

当初は意見・情報交換に留まっていたが、



●点字つき絵本の出版と普及を考える会が作製した『点字つき絵本・さわる絵本リスト』(2008年10月現在)。A4判4ページにカラー印刷で計58点を収録している。

■点字つき絵本の出版と普及を考える会

設立 2002年
代表 岩田美津子(いわた・みつこ)氏
連絡先 ☎550-0002 大阪府大阪市西区江戸堀1-25-35
近商ビル2階「てんやく絵本ふれあい文庫」内
問い合わせ先 TEL: 06-6444-0133 FAX: 06-6444-0133

06年には具体的な普及活動の一環として『点字つき絵本・さわる絵本リスト』を作製。今年10月には3度目の改訂版が完成した。今回は全国90社にアンケート調査し、全部で58点(現在絶版・品切れ中の5点を含む)を収録、表紙と概要を紹介している。

同リストは書店での販促イベントなどで配布しているほか、返信用封筒を用意して申し込みれば誰でも郵送してもらえる。(高嶋健夫)



<アクセシブルデザインの普及に向けて一言> 課題を克服し、必要な人に必要な情報を！

岩田美津子・点字つき絵本の出版と普及を考える会代表

点字や触図の付いた絵本は、見えない人と見える人が一緒に楽しめる「共用品」です。私がボランティアで手作りの点訳絵本の貸し出しを始めた25年前に比べれば、出版点数も、蔵書として置いてくれる公共図書館の数も格段に増えました。

けれども、まだまだ視覚障害者のニーズに応えるレベルには達していません。必要な人に必要な情報が十分に届いていないのです。

点字つき絵本の普及を妨げている要因はいろいろありますが、最大の課題はやはり制作コストです。出版点数を増やすためには、出版業界がもっと力を入れてこの問題に向き合い、各社を応援する仕組みを作っていく必要があります。

海外には補助金を出している国も多く、社会全体で解決策を探っていただこうことを切望しています。

(談)

◎ニュース&トピックス

徳武産業(株)

「あゆみ」シューズに高級外出靴シリーズが登場 欧洲メーカーとのコラボレーションで開発

高齢者や障害のある人に配慮したアクセシブルデザイン(AD)の室内・室外用靴「あゆみシューズ」を展開する徳武産業(本社香川県さぬき市、十河孝男社長)は、ヨーロッパのメイドインイタリアの靴メーカー2社と連携し、新しいジャンルの外出用靴を発売した。9月の「国際福祉機器展2008」で発表し、10月から正式発売した。

女性用の「エクセンシブル01」=写真=、「同02」、男女兼用の「あゆみエイブル01」「同02」の4タイプがある。色はそれぞれ黒、茶の2色。いずれも、履きやすく、体への負担が少ないといった「あゆみシューズ」の基本コンセプトに添って開発し、よりファッショナブルで高級感あるシリーズに仕上げている。

「エクセンシブル」はオランダで企画、イタリアでデザインしたもので、「第二の皮膚」と呼ばれるストレッチ素材を採用し、履き心地を高めている。希望小売価格は3万240円。

一方の「あゆみエイブル」はイタリア製の天然なめしの上質皮革、甲上部のストレッチ素材を使用し、つまずき防止や足運びをよくするローリング底を採用している。価格は1万7640円。なお、いずれも両足販売のみで片足販売はしていない。

(高嶋健夫)



◎ニュース&トピックス

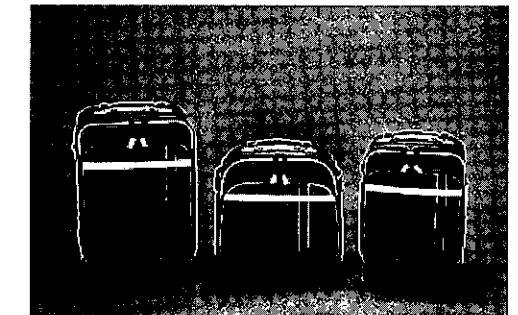
スワニー(株)

「ウォーキングバッグ」に旅行用の新タイプ 「アーモ」と「スポート・プラス」を同時発売

杖のように体を支えながら歩ける独自設計のキャリーバッグ「ウォーキングバッグ」を展開するスワニー(本社香川県東かがわ市、三好鉄郎社長)は、新たに旅行用の大型鞄「アーモ」「スポート・プラス」の2ブランドを追加した。9月の「国際福祉機器展2008」で発表し、10月から正式発売した。

「ウォーキングバッグ」は、「湾曲取っ手」などの独創的なハンドル機構や360度回転する4輪キャスターなどによって、体の横に置き、体をあずけるようにして歩けるようにした鞄で、開発は三好社長自身が行った。

新製品の「アーモ」は容量17リットルの「S」、同28リットルの「M」、同37リットルの「XL」の3タイプあり、色は黒、茶の各2色。希望小売価格はそれぞれ1万6800円、1万



8900円、2万1000円となっている。

一方の「スポート・プラス」=写真=は若々しくおしゃれなデザインを採用したスポーツタイプ。こちらも容量17リットルの「S」、同19リットルの「M」、同28リットルの「L」の3タイプあり、色は黒、茶、オレンジの3色。希望小売価格はSとMが1万9950円、Lが2万2050円。

(高嶋健夫)

R60マーケティング（上）

後藤芳一（財共用品推進機構運営委員、日本福祉大学客員教授）

シニア^{①～④}（小さい添え字^{①～④}は、同様の用語が本講の第1～54講に既出であることを示す）市場^{②③～⑥⑦⑧⑨⑩～⑪⑫⑬～⑭}は、期待されてきた割には、捉え方が難しい。本講は、最近提示された「R60マーケティング」という視点をもとに、団塊の世代への展開策を考える。共用品^{③④⑤⑥⑦⑧～⑩⑪⑫～⑭}への取り組みとも共通点がある。

1. 背景と課題

（1）高齢者数の増加

人口の高齢化が進み、シニアの人口が増えている。なかでも、1947～49年生まれの第1次ベビーブーム世代（毎年約270万人出生、団塊の世代）がいま、次々と60歳を迎えており、「2007年問題^⑤」は、同じことの裏返しである。この世代は、消費の面では、新しく伸びる市場と期待されている。

（2）課題

一方、シニア市場が捉えにくいということも指摘される。その原因は、これまでの試みでは、シルバー市場、熟年世代、高齢者^{①～⑥⑦⑧⑨～⑩⑪～⑫⑬～⑭}マーケットなどの呼称をみるとおり、熟年以上の世代を、ひとまとめに見てしまうのが原因である。熟年各世代ならではの特徴を捉え切れず、それぞれに照準をあてた展開ができていない。

2. 団塊世代の新しい捉え方

（1）「R60世代」の概念

団塊の世代は「R60世代」と捉えられる。「R60世代」は、団塊の世代を中心とした60歳前後、50代半ばから60代後半（20代後半向けの雑誌が「R25」と称しており、R60はそれに対応している）であり、同世代向けのマーケティングが考えられる。

（2）「R60世代」の特徴

R60世代の特徴をめぐる結論は「R60世代は、年を取っただけの若者」ということである。R60世代は、高度成長期に人生を歩みながら新しい商品を生み、それを試して支えて、経済大

を作ってきた。その意味では、消費のリーダーであった。「もの心ついたあと、ずっと経済が成長していた」という点で、60歳の人は、70歳よりも30歳の人に近い。

3. 「(70-60) > (60-30) の法則」

団塊世代の生き方、暮らし、消費などの特徴は、「法則」として表すことができる。表題の70、60、30という数字は、年齢を示す。70歳は戦前生まれ、60歳は団塊の世代、30歳は団塊ジュニアよりも下の若者たちである。

表題の不等式は「団塊世代（60歳）のライフスタイルは、10歳上の人たちより、若者たちのそれに近い」ということを表す。「R60世代が、年をとった若者である」（前述の2(2)）ということを、式で表したものである。この法則が、R60世代へのマーケティングを考える際の道しるべになる。

4. R60世代のシニア像

R60世代の姿は、生き方や暮らし方を表す、いくつかの視点で描くことができる。その視点としては、「生き方」「趣味、娯楽や教養」「コミュニケーション」「消費のスタイル」などがある。

例えば「生き方」では、「大切にしているのは『楽しさ』／小遣いは比較的多め、外食にもお金をかける」という“料理派シニア”と、「よりどころは『孫』『友人』『健康や体力』」という“掃除派シニア”的ように、同じR60世代でも両極端ともいえる姿がある（“内は、ニックネームをつけて表したものである）。

「生き方」という視点では、ほかにも、「見栄張りシニアvs庶民派シニア」「ボランティアシニアvs仕事派シニア」「まだまだ女磨きシニアvsもう頑張らないシニア」などの対比をすることもできる。

（「R60世代のシニア像」の他の視点の事例は、次講に続く。本講2～4の内容は、9月に日本経済新聞出版社から刊行された『R60マーケティング』〔高嶋健夫・福岡順作著〕の記述を元に作成した）

知りたい時が、話したい時 ニーズに合った韓国の電話番号案内

☆…5年ほど前、韓国に留学していた日本人が著した本の中で、韓国の電話番号案内のシステムについて紹介されていた。

電話番号案内にかけ、知りたい人々や会社・機関の名前を告げ、それに答えてくれるところまでは日本と同じ。違うのはそれから先。教えてくれた後、「その方におつなぎしますか？」とたずねてくる。つなぎたければ指定されたキーを押すだけで、電話番号がわからなかった相手とそのまま話せる仕組みのこと。もちろん、すぐにかける必要がない時には、番号を聞いてそのまま切ることもできる。

多くの場合、番号をたずねるのは、いますぐにかけたいからだ。ところが日本では、聞いた番号をメモし、電話をいったん切り、それからもう一度、教えてもらった電話番号にかけ直すといった手間が必要になる。韓国でのこのシステムを知った時、

ちょっとしたことだけれど、何ともニーズにあったサービスだと思った。

☆…日本では導入されていないのか改めて調べたところ、同様のサービス「ダイヤル104」が昨年7月1日から始まっていた。ためしに、携帯電話からかけてみたら、電話番号は教えてくれたが、電話会社が異なるため、直接接続することはできないとの説明であった。せっかくの新サービスなのに残念である。

ただ、通常は有料サービスだが、障害のある人には障害の種別、程度によって無料になるとの説明がホームページに書いてあった。

☆…正確な年月日は覚えていないが、東京の電車、バスが1つのカードで乗降できるようになるだいぶ以前から、韓国ではそれが可能だった記憶がある。言葉が理解できない海外の人などにもわかるように、地下鉄の駅に丸く大きく、路線を示すアルファベットの頭文字と数字を表示す



星川 安之助
だより

る「駅ナンバリングシステム」の導入も、韓国の方が日本よりだいぶ早かったように思う。

反対に、国際標準化機構（ISO）に日中韓3カ国で共同提案し、承認された包装容器の識別、スイッチの「ON」への凸記号表示などアクセシブルデザインの工夫は、日本が考案したものを見ても採用している。

さまざまな国・地域に、さまざまな優れた工夫が、もっとたくさんあるものと思われる。中には、多くの国が採用することによって、より多くの人が生活しやすくなるものも少なくないだろう。必要な配慮や工夫を普及させるためには、多くの壁が立ちはだかることも予想されるが、そうした壁を取り除いていくとともに、身近なところから「生活しやすさ」を発見し続けていくことも、今後の大きな課題だと思う。

（★）

共用品通信

【トピックス】

○星川専務理事が「標準化貢献賞」を受賞（10月20日）
(財)日本規格協会（会長・佐々木元氏）から、星川が「標準化貢献賞」を受賞した。アクセシブルデザイン（AD）の国内外での標準化に対する貢献と功績が認められたもの。

【委員会】

○第1回自動販売機JIS原案作成委員会（本委員会）（9月11日）
○第2回アクセシブルデザイン技術標準化開発委員会（9月30日）
○第2回アクセシブルデザイン本委員会（10月7日）

【海外からの訪問研修】

○(財)海外技術者研修協会（AOTS）国際標準化入門研修コース（10月8日）
インドネシア、ベトナムなどからの研修生20人に、金丸が講義。
○国際協力機構（JICA）アセアン国際標準開発研修（10月28日）

タイ、マレーシアなどアセアンからの研修生10人に、金丸が講義。

【講義・講演】

○東京都昭島市立拝島第三小学校で共用品授業（10月16日）
5年生約100人に、森川、高橋玲子さんが授業。
○東京都千代田区立麹町小学校で共用品授業（11月6日）
5年生約80人に、森川、高橋玲子さんが授業。

＜読者の皆様へのお願い＞

「共用品通信 情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。



(株)小学館「ドラえもんの車いすの本」 増刷重ね、インドネシア語・タイ語にも翻訳



■株小学館『ドラえもんの車いすの本』
 ▽刊行時期：1999年11月
 ▽編者：財共用品推進機構
 ▽価格：1260円+税
 ▽体裁：B5判・114ページ
 ▽問い合わせ先：(株)小学館
 (TEL: 03-3230-5416, FAX: 03-3230-2527=編集)
 ▽ホームページ：
<http://www.shogakukan.co.jp/>

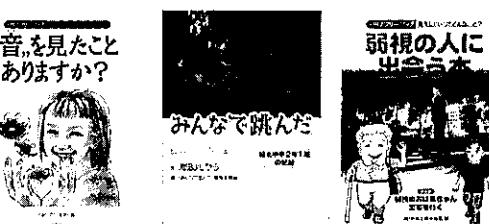
■右から日本語版、インドネシア語版、
 タイ語版（現寸比）

た1999年以来、版を重ね、今年8
 月には掲載商品などを一部改訂し
 た6刷が出来上がった。

本書は共用品推進機構が編者と
 なり、写真家・星川ひろ子さんの
 写真・文による「北斗くんのい
 す」、まんがの「ドラえもんの空
 飛ぶ車いす」、機構、堤愛子さん
 らでまとめた「いっしょに歩いて
 みませんか」の3部構成で、車い

す使用者の不便さをわか
 りやすく紹介している。

小学館によると、公共
 図書館からの注文がコン
 スタントに入り、最近は
 「総合学習などの授業で
 使いたい」と問い合わせ



アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル 第57号

2008（平成20）年11月25日発行
 "Incl." vol.9 no.57
 ©The Accessible Design Foundation of Japan
 (The Kyōyō-Hin Foundation), 2008
 隔月刊、奇数月に発行
 一般頃価 1部1000円
 (但し、個人・法人賛助会員については、
 購読料は年会費の中に含まれています)
 ※視覚に障害のある方など、墨字版がご
 利用できない方にはPDFファイルのフ
 ロッピーディスクを提供しています。
 必要のある方は、事務局までお申し出
 ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構
 郵便番号 101-0064
 東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル2F
 電話：03-5280-0020
 ファックス：03-5280-2373
 Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
 ホームページURL：<http://kyoyohin.org/>

発行人 鴨志田厚子
 事務局 星川 安之
 森川 美和
 金丸 淳子
 水野由紀子
 高橋 裕子
 松岡 光一
 編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 小川 光彦
 (五十音順) 後藤 芳一
 生田目美紀
 山本百合子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)
 サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者や
 このままの形では利用できない方々のため
 に、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複
 写することを承認いたします。その場合は、
 (財)共用品推進機構までご連絡ください。
 上記以外の目的で、無断で複写複製す
 ることは著作権者の権利侵害になります。

てくる小学校の先生も増えている
 という。

海外でも翻訳され、好評を博し
 ている。インドネシアでは05年に、
 タイでは06年にそれぞれの大手出
 版社から現地語版が刊行された。
 インドネシアでは現地のNGOが
 小学校に500部寄贈するなど、世
 界の人気者・ドラえもんと共に
 “日本発バリアフリーの心”が子
 供たちに届けられている。

「バリアフリーブック」には、
 他にも機構編で『“音”を見たこ
 とありますか?』『みんなで跳ん
 だ』『弱視の人間に出会う本』など
 も刊行されている。

(高嶋健夫)